

女子短期大学生の運動有能感の実態と関連要因の検討

— 身体的有能さの認知と受容感に着目して —

及 川 直 樹

Factors Affecting Sport Competence in Women's Junior College
Students: Focusing on Perceived Physical Competence and
Feeling of Receiving Acceptance by Peer and Teacher

Naoki OIKAWA

Abstract : This study examined women's junior college students' sport competence and the factors influencing perceived physical competence and peer and teacher acceptance. A total of 100 freshmen—all members of the Early Childhood Care and Education Department (mean: 18.14 ± 0.45 years)—from a women's junior college participated in the study. A survey was conducted to assess the students' sport competence (perceived physical competence, feeling of receiving acceptance by peer and teacher, and locus of control for exercise), affection for exercise, pleasure in exercise, and extracurricular activities at junior or high school. Further, the effect of the students' locus of control for exercise, affection for exercise, pleasure in exercise, and extracurricular activities at junior or high school was investigated using multiple regression analyses.

The results were as follows. While the students showed a decreased awareness of perceived physical competence and an increased awareness of feeling of receiving acceptance by peer and teacher. For women's junior college students, their locus of control for exercise, affection for exercise, and extracurricular activities at junior or high school were significant and direct predictors of their perceived physical competence. In relation to their feeling of receiving acceptance by peer and teacher, locus of control for exercise and pleasure in exercise were significant and direct predictors. Therefore, in order to raise perceived physical competence and feeling of receiving acceptance by peer and teacher, it is especially important for women's junior college students to raise their locus of control for exercise.

Key words : 女子短期大学生 (women's junior college student), 幼児教育学科 (early childhood care and education department), 身体的有能さの認知 (perceived physical competence), 受容感 (feeling of receiving acceptance by peer and teacher), 統制感 (locus of control for exercise)

問題と目的

及川¹⁾は、幼稚園や保育所での運動指導に

おける保育者の役割の重要性を指摘するとともに、保育者養成校の女子学生を対象に、運動指導に対する自信に関連する要因を検討し

た。その結果、これまでに学生が自己の運動能力や運動技能に対して肯定的に認知したり（身体的有能さの認知）、運動場面で教師や仲間から受け入れられていると認知したこと（受容感）が、運動指導に対する自信を高めることを見いだした。

保育者養成校の女子学生の年代における体力・運動能力は、体力水準が高かった昭和60年頃と比較すると、依然として低い水準にある²⁾。また、女子学生の中には運動に対して苦手意識をもつ者もみられる³⁾。このような実態は、女子学生の身体的有能さの認知や受容感といった運動有能感に影響することが推測される。しかし、保育者養成校の女子学生を対象に、運動有能感の実態を調査した研究は行われていない。保育者養成校の女子学生は運動有能感をどの程度認知しており、その認知はどのような要因と関連しているのだろうか。

そこで、本研究では保育者養成校の女子学生を対象に、運動有能感の実態を把握するとともに、運動指導に対する自信への影響要因である身体的有能さの認知と受容感に着目し、それらに影響する要因を検討することにした。

方 法

1. 調査対象

長野県内のA短期大学幼児教育学科1年の100名であった（全て女子、平均 18.14 ± 0.45 歳）。

2. 調査方法・内容

学生に対し、運動有能感などに関する質問紙調査を筆者が担当する授業終了後に実施した。学生には本研究への参加に際し、研究の趣旨、内容及び結果の取り扱いなどについて説明し、同意を得た。調査時期は、2010年5～6月及び2011年4月であった。

質問項目について、運動有能感は岡沢・北・諏訪⁴⁾が作成した尺度を用いた。この運動有能感尺度は、身体的有能さの認知、受容感、

統制感（自己の努力や練習によって運動をどの程度コントロールすることができるかに関する認知）、の3下位尺度、各4項目で構成されている。学生は、これまでの体育授業や部活動などの運動場面を想起しながら、各項目においてよくあてはまる（5点）～まったくあてはまらない（1点）の中から1つ選択した。その回答をもとに、各下位尺度の総得点を算出した。各下位尺度の総得点は4～20点の範囲であり、得点が高いほど運動有能感を高く認知していることを示す。

身体的有能さの認知や受容感に関連する項目としては、及川¹⁾を参考に運動に対する感情（好き・やや好き・やや嫌い・嫌い）、運動の楽しさ（楽しい・やや楽しい・やや楽しくない・楽しくない）、中学・高校時の部活動の所属状況を取り上げた（かつこ内は選択肢）。運動に対する感情と運動の楽しさは、運動に対して好意的な感情をもっている、あるいは運動に対して楽しさを感じている順に4～1点で評定した。中学・高校時の部活動の所属状況は、当時所属していた部活動名を尋ね、その回答をもとに運動部、あるいは文化部・所属なし等に分類した。なお、運動部は競技を実際に、かつ途中退部せずに行っていた場合とし、マネージャーや途中退部した場合は、文化部・所属なし等に分類した。

3. 分析手続き

まず、身体的有能さの認知、受容感、統制感は平均と標準偏差を算出し、岡沢・北・諏訪⁴⁾の大学生女子の平均との差をt検定で検定した。運動に対する感情と運動の楽しさは、平均と標準偏差を算出した。中学・高校時の部活動の所属状況は、クロス集計表を作成し、中学・高校時それぞれの所属状況及びそれらの組み合わせにおける人数の偏りを χ^2 検定で検定した。

次に、身体的有能さの認知及び受容感と統制感、運動に対する感情、運動の楽しさにおけるピアソンの積率相関係数を算出し、無相

関検定を行った。また、部活動の所属状況の組み合わせの4群間における身体的有能さの認知及び受容感の平均の差を一要因分散分析で検定した。多重比較には、TukeyのHSD法(5%水準)を用いて検定した。

最後に、身体的有能さの認知と受容感をそれぞれ従属変数、その他の項目を独立変数とする重回帰分析を行った。

以上の統計処理には、SPSS21.0を用いた。

結 果

1. 各項目の基本統計量

表1に、身体的有能さの認知、受容感、統制感、運動に対する感情、運動の楽しさの平均と標準偏差を示した。運動有能感の3下位尺度の中で最も平均が高かったのは受容感で、続いて統制感、身体的有能さの認知の順であった。岡沢・北・諏訪⁴⁾では、身体的有能さの認知が 10.40 ± 3.77 、受容感が 14.06 ± 3.20 、統制感が 14.43 ± 3.33 であった。各下位尺度の平均の差をt検定で検定した結果、身体的有能さの認知($t(99)=3.08$, $p<0.01$)と受容感($t(99)=8.19$, $p<0.001$)において有意な差が認められた。運動に対する感情と運動の楽しさの平均は、いずれも3点を超えており、運動に対して好意的な感情をもってい

表1 各項目の基本統計量

項 目	平 均	標準偏差
身体的有能さの認知	9.18	3.97
受容感	16.26	2.69
統制感	14.33	3.60
運動に対する感情	3.04	0.97
運動の楽しさ	3.40	0.72

たり、運動を楽しんでいる傾向がみられた。

表2に、中学・高校時の部活動の所属状況をクロス集計した結果を示した。中学時の所属状況は、運動部が51名、文化部・所属なし等が49名であった。 χ^2 検定の結果、人数の偏りは有意ではなかった($\chi^2(1)=0.04$, ns)。高校時の所属状況は、運動部が27名、文化部・所属なし等が73名であった。 χ^2 検定の結果、人数の偏りは有意であった($\chi^2(1)=21.16$, $p<0.001$)。また、所属状況の組み合わせとして最も多かったのは、中学・高校時ともに文化部・所属なし等の44名であった。続いて、中学時は運動部で高校時は文化部・所属なし等が29名、中学・高校時ともに運動部が22名、中学時は文化部・所属なし等で高校時は運動部が5名の順であった。 χ^2 検定の結果、人数の偏りは有意であった($\chi^2(1)=13.75$, $p<0.001$)。

2. 身体的有能さの認知及び受容感と各項目の相関

表3に、身体的有能さの認知及び受容感と統制感、運動に対する感情、運動の楽しさの相関係数を示した。身体的有能さの認知は、統制感や運動に対する感情との間に強い正の相関($r=0.71\sim0.75$)がみられた。受容感は、各項目との間にいずれも中程度の正の相関($r=0.41\sim0.50$)がみられ、運動の楽しさとの相関が最も強かった。

表4に、中学・高校時の部活動の所属状況の組み合わせにおける身体的有能さの認知と受容感の平均と標準偏差を示した。身体的有能さの認知と受容感の平均が最も高かったのは、中学・高校時ともに運動部であった。統

表2 中学・高校時の部活動の所属状況のクロス集計表

		高 校		合 計
		運動部	文化部・所属なし等	
中学校	運動部	22	29	51
	文化部・所属なし等	5	44	49
	合 計	27	73	100

表3 身体的有能さの認知及び受容感と各項目の相関係数

	1	2	3	4	5
1. 身体的有能さの認知	—	0.41***	0.71***	0.75***	0.65***
2. 受容感		—	0.47***	0.44***	0.50***
3. 統制感			—	0.62***	0.65***
4. 運動に対する感情				—	0.68***
5. 運動の楽しさ					—

***p<0.001

表4 部活動の所属状況の組み合わせによる身体的有能さの認知と受容感の平均の比較

項 目	中学・高校時の 部活動の所属状況	平 均	標準偏差	F 値	多重比較
身体的有能さ	運動部／運動部	12.55	3.08	20.89***	運動部／運動部, 運動部／文化部>文化部／文化部 運動部／運動部>文化部／運動部
	運動部／文化部	10.76	3.61		
	文化部／運動部	7.00	3.46		
	文化部／文化部	6.70	2.77		
受容感	運動部／運動部	17.32	2.19	4.14**	運動部／運動部, 運動部／文化部>文化部／文化部
	運動部／文化部	16.97	2.38		
	文化部／運動部	16.20	2.68		
	文化部／文化部	15.27	2.83		

p<0.01 *p<0.001

運動部／運動部—中学・高校時ともに運動部

運動部／文化部—中学時は運動部で、高校時は文化部・所属なし等

文化部／運動部—中学時は文化部・所属なし等で、高校時は運動部

文化部／文化部—中学・高校時ともに文化部・所属なし等

いて、身体的有能さの認知、受容感ともに中学時は運動部で高校時は文化部・所属なし等、中学時は文化部・所属なし等で高校時は運動部、中学・高校時ともに文化部・所属なし等の順であった。部活動の所属状況による身体的有能さの認知及び受容感の平均の差を一要因分散分析で検定した結果、身体的有能さの認知において有意な主効果が認められた($F(3,96)=20.89$, $p<0.001$)。多重比較の結果、中学・高校時ともに運動部と、中学時は運動部で高校時は文化部・所属なし等の平均が、中学・高校時ともに文化部・所属なし等よりも高かった。また、中学・高校時ともに運動部の平均は、中学時は文化部・所属なし等で高校時は運動部よりも高かった。さらに、受容感においても有意な主効果が認められた($F(3,96)=4.14$, $p<0.01$)。多重比較の結果、中学・高校時ともに運動部と、中学時は運動

部で高校時は文化部・所属なし等の平均が、中学・高校時ともに文化部・所属なし等よりも高かった。

3. 身体的有能さの認知と受容感に影響する要因

身体的有能さの認知と受容感に影響する要因を検討するために、身体的有能さの認知と受容感をそれぞれ従属変数とする重回帰分析を行った。なお、中学・高校時の部活動の所属状況は質的変数のため、ダミー変数を用いて変換した。その上で、変数選択を行った。様々なモデルにおいて β が有意な変数を優先的に投入し、その際の R^2 と自由度調整済み R^2 の変動や両者の差に注目し、できるだけ少ない変数で身体的有能さの認知と受容感を推定することを目指した。

強制投入法による重回帰分析の結果、最終的に採用されたモデルが表5、表6である。

表5 身体的有能さの認知を従属変数とする重回帰分析結果

	β
統制感	0.43 ***
運動に対する感情	0.31 ***
部活動の所属状況(運動部/運動部)	0.28 ***
部活動の所属状況(運動部/文化部)	0.20 **
部活動の所属状況(文化部/運動部)	-0.07
R^2	0.72 ***
自由度調整済み R^2	0.71 ***

 β : 標準偏回帰係数 R^2 : 決定係数** $p < 0.01$ *** $p < 0.001$

部活動の所属状況は、「文化部/文化部」を基準カテゴリーとするダミー変数。

表6 受容感を従属変数とする重回帰分析結果

	β
統制感	0.25 *
運動の楽しさ	0.34 **
R^2	0.29 ***
自由度調整済み R^2	0.27 ***

 β : 標準偏回帰係数 R^2 : 決定係数* $p < 0.05$ ** $p < 0.01$ *** $p < 0.001$

身体的有能さの認知のモデル(表5)では、統制感、運動に対する感情、部活動の所属状況(運動部/運動部)、部活動の所属状況(運動部/文化部)の β が有意であり、統制感の β が最も高かった。受容感のモデル(表6)では、統制感と運動の楽しさの β が有意であり、運動の楽しさの β が最も高かった。なお、両モデルで上げられなかった変数は、いずれも β が有意ではなかった。また、両モデルにおける各変数のVIF(分散拡大要因)は、身体的有能さの認知では1.08~2.29、受容感ではいずれも1.71であり、多重共線性は認められなかった。

考 察

1. 女子学生の運動有能感の実態と各項目の関連

学生の運動有能感を岡沢・北・諏訪⁴⁾と比較したところ、身体的有能さを低く、受容感を高く認知する傾向が認められた。大学生は

中学・高校時に体育授業を受けてきた中で、共通した一定程度の運動経験を得ていると仮定すると、身体的有能さを低く認知する傾向については、中学・高校時の部活動の所属状況が影響したのかもしれない。具体的には、高校時は文化部・所属なし等が多く、所属状況の組み合わせも中学・高校時ともに文化部・所属なし等が最も多いというように、体育の授業以外での運動経験が不足したことが理由として考えられる。受容感を高く認知する傾向については、共感性や社交性といった保育者を志望する学生がもつ特性⁵⁾の影響が推測されるが、このことについてはさらなる検討が必要である。

身体的有能さの認知及び受容感と各項目の相関係数より、身体的有能さの認知は運動に対する感情と、受容感は運動の楽しさとの相関が最も強かった。また、身体的有能さの認知及び受容感と各項目の相関の仕方に着目すると、相対的に身体的有能さの認知は受容感

よりも各項目との相関が強かった。よって、身体的有能さの認知と受容感では、それぞれと関連する要因の強さが異なると考えられる。

中学・高校時の部活動の所属状況による身体的有能さの認知及び受容感の平均の比較より、中学・高校時ともに運動部と、中学時は運動部で高校時は文化部・所属なし等が、中学・高校時ともに文化部・所属なし等よりも身体的有能さの認知や受容感が高かった。このことから、中学時に運動部に所属したり、高校時も継続して運動部に所属したことが、身体的有能さの認知や受容感と関連することが示唆された。

2. 身体的有能さの認知に影響する要因

重回帰分析の結果より、身体的有能さの認知への直接的な影響要因として、統制感、運動に対する感情、部活動の所属状況（運動部／運動部）、部活動の所属状況（運動部／文化部）が見いだされた。よって、統制感が高い、運動に対して好意的な感情をもつ、中学時に運動部に所属した、中学・高校時ともに運動部に所属したことが、身体的有能さの認知を高めると推察される。特に、各変数の β の大きさを踏まえると、統制感を高めることに主眼を置くことが重要である。具体的には、正事態（スポーツ・運動場面における勝利や成績の伸びなどの好ましい事態）の原因を努力に帰属するほど統制感が高く評定される⁶⁾ため、体育授業において努力帰属を育てる条件である、努力帰属のしやすい評価方式、努力のしがいのある課題の提示、非評価的雰囲気での自己選択⁷⁾に配慮する必要がある。

また、運動に対して好意的な感情をもつためには、運動能力・運動技能に対する劣等感や、教師の指導に対する不満など、大学生が体育や運動に対して否定的な感情をもつ理由⁸⁻¹¹⁾を解消していくことが効果的である。

以上の事柄に配慮することにより、統制感と運動に対する感情が相互に高まっていく($r=0.62$)。そして、体育授業や部活動以外

でも運動を実施する機会を確保し、運動経験を得ていくことが、総体的に身体的有能さの認知を高めていくといえる。

3. 受容感に影響する要因

重回帰分析の結果より、受容感への直接的な影響要因として、統制感と運動の楽しさが見いだされた。よって、統制感が高い、運動を楽しみと感じることが、受容感を高めると推察される。特に、各変数の β の大きさを踏まえると、運動の楽しさを感じられるようにすることが重要である。女子は、他者の承認や賞賛を得たいという社会的承認志向動機が優位である¹²⁾とともに、大学の体育授業においては協調性や連帯感を味わい、お互いに信頼感が湧いたり、友達ができたりする「人間関係」や、人の運動を見たり、応援したりする「観戦・応援」により、運動の楽しさを感じる傾向にある¹³⁾。これらを踏まえると、運動の楽しさを喚起させるには、北見・吉野¹⁴⁾や井上・岡澤・元塚¹⁵⁾が報告するような「教え合い」を導入とした授業実践が有効であろう。こうして得られる運動の楽しさと統制感は相互に関連しながら($r=0.65$)、受容感を高めていくと推測される。

4. 運動指導に対する自信の向上に向けて

身体的有能さの認知と受容感のモデルを概観すると、いずれのモデルでも統制感が直接的な影響要因として採用された。したがって、身体的有能さの認知と受容感の両方を高めるには、統制感は重要な変数であるといえる。特に、両モデルにおける統制感の β の大きさより、身体的有能さの認知に及ぼす影響の方が強いことや、学生は身体的有能さを低く認知する傾向にあったことを勘案すると、統制感を高めることで身体的有能さの認知を促進し、運動指導に対する自信を向上させていくアプローチが最も効果的であろう。

5. 本研究の限界と今後の課題

まず、本研究では短期大学1年の学生を対象に、4～6月に調査を実施した。保育者養

成は短期大学以外にも4年制大学や専門学校などで行われており、修業年限やカリキュラム、入学する学生の実態などが異なっている。また、身体的有能さの認知のモデルにおいて、中学・高校時の部活動の所属状況といった過去の運動経験が直接的な影響要因として採用されたことを考慮すると、大学での体育授業の履修や部活動への所属などにより、身体的有能さの認知や受容感が変化することが予想される。したがって、今後は対象とする保育者養成校を増やしていくことで結果の一般化に努めるとともに、縦断的な調査を行い、身体的有能さの認知や受容感の推移を検討していく必要がある。

次に、身体的有能さの認知と受容感のモデルの R^2 より、本研究で採用した変数では身体的有能さの認知を約72%説明することができたが、受容感を約29%しか説明できなかった。よって、受容感に関しては他にも影響要因が存在することが考えられる。今後は、受容感に影響すると考えられる要因を幅広く収集し、それらを組み合わせて受容感の推定に最適なモデルを構築していくことが必要である。

ま と め

保育者養成校の女子学生100名を対象に、運動有能感の実態を把握するとともに、運動指導に対する自信への影響要因である身体的有能さの認知と受容感に着目し、それらに影響する要因を検討した。主な結果は以下の通りである。

- (1) 学生は身体的有能さを低く、受容感を高く認知する傾向が認められた。
- (2) 重回帰分析の結果より、身体的有能さの認知には統制感、運動に対する感情、中学・高校時の部活動の所属状況が、受容感には統制感と運動の楽しさが影響していた。
- (3) 身体的有能さの認知と受容感を高めるには、統制感は重要な変数であり、統制感を高めることで身体的有能さの認知を促進し、

運動指導に対する自信を向上させていくアプローチが最も効果的であると推察された。

謝 辞

本研究を行うにあたり、快く協力していただきました学生の皆さんに心より御礼申し上げます。

引用文献

- 1) 及川直樹：保育者養成校における学生の運動指導に対する自信の実態と関連要因の検討。幼児体育学研究, 4(1), 41-52, 2012.
- 2) 文部科学省：平成24年度体力・運動能力調査報告書。
< http://www.mext.go.jp/component/b_menu/other/_ics_files/afieldfile/2013/10/15/1340106_3.pdf > (17 Feb. 2014).
- 3) 岩井幸博：保育者養成校における女子学生の運動・スポーツの好き嫌いと体力の関係について。貞静学園短期大学研究紀要, 1, 49-56, 2010.
- 4) 岡沢祥訓・北真佐美・諏訪祐一郎：運動有能感の構造とその発達及び性差に関する研究。スポーツ教育学研究, 16(2), 145-155, 1996.
- 5) 藤村和久：保育士、幼稚園教諭を目指す学生のための保育者適性尺度の構成。大阪樟蔭女子大学人間科学研究紀要, 9, 129-143, 2010.
- 6) 伊藤豊彦：原因帰属様式と身体的有能さの認知がスポーツ行動に及ぼす影響—スポーツ行動に関する原因帰属モデルの検討—。体育学研究, 31(4), 263-271, 1987.
- 7) 稲垣佳世子：効力感を育成する。自己学習能力を育てる(波多野諄余夫編), 東京大学出版会, 東京, 1980, pp.78-95.
- 8) 藤巻公裕：体育に対する態度の変化につ

- いて、埼玉大学紀要（教育学部）教育学，46（1），47-54，1997.
- 9）波多野義郎・中村精男：「運動ぎらい」の生成機序に関する事例研究．体育学研究，26（3），177-187，1981.
- 10）伊藤精男・波多野義郎：「体育授業ぎらい」の生起に関する因果推論の試み．体育学研究，27（3），239-246，1982.
- 11）岡澤祥訓・仲田幸代：運動嫌いと運動有能感との関係．体育科教育，46（13），42-44，1998.
- 12）伊藤豊彦：スポーツにおける原因帰属様式の因子構造とその特質．体育学研究，30（2），153-160，1985.
- 13）徳永幹雄・橋本公雄：体育授業の「運動の楽しさ」に関する因子分析的研究．健康科学，2，75-90，1980.
- 14）北見 裕・吉野 聡：器械運動の授業における教え合い学び合い活動が生徒の運動有能感に及ぼす影響－中学校体育における実践事例の分析を通して－．茨城大学教育実践研究，27，77-90，2008.
- 15）井上寛崇・岡澤祥訓・元塚敏彦：体育授業における運動有能感を高める工夫が運動意欲および楽しさに及ぼす影響に関する研究－運動有能感の高い児童生徒の視点から－．教育実践総合センター研究紀要，17，103-111，2008.